

松ヶ崎遺跡出土の石斧柄について

川崎 雄一郎

2021 8月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

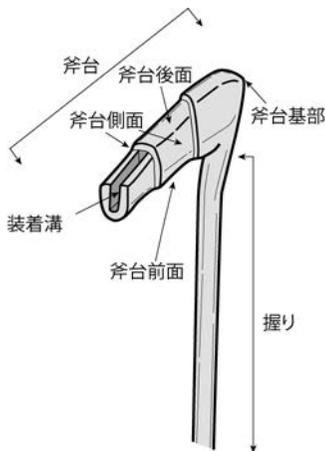
# 松ヶ崎遺跡出土の石斧柄について

川崎 雄一郎

## 1. はじめに

縄文時代の磨製石斧について、柄の主軸に対して刃の向きが平行する縦斧であるか、直行する横斧であるかといった、柄に装着した際の向きについての言及は古くから存在する。高橋健自は、大正2(1913)年に刊行された概説書の中で、民族事例を引きながら、磨製石斧に縦斧と横斧といった柄に対する刃の向きが異なる斧が存在する可能性を指摘している<sup>(注1)</sup>。その後、実際に出土した磨製石斧に対し、縦斧と横斧の区別を行い、その用途の推定がなされた<sup>(注2)</sup>。そして、昭和52(1977)年には、佐原真が「石斧論」の中で、縦斧と横斧の区別について、形態、使用痕、石斧柄、民族事例を総合的に検討した。「石斧論」では、横斧優勢から縦斧優勢へ、といった日本列島における磨製石斧組成の変遷とその歴史的意義が論じられ、現在の磨製石斧研究の基礎が築かれた。当時、滋賀県滋賀里遺跡では、縄文時代晩期の石斧柄が発見されている<sup>(注4)</sup>。また、福井県鳥浜貝塚でも、縄文時代前期の石斧柄が報告され、生産も含めた石斧柄の実態を明らかにされた<sup>(注5)</sup>。S.A.セミーヨフによる石器使用痕分析の成果が日本で紹介されたのもこの直前のことであり<sup>(注6)</sup>、1960年代後半から1970年代にかけて、日本の磨製石斧研究は大きく進展した。その後、佐原は「石斧再論」の中で、新知見や補足的内容を論じ、一連の磨製石斧研究を『斧の文化史』にまとめている<sup>(注8)</sup>。

佐原の指摘で、最も重要なものは、縦斧優勢への石斧組成の変化を縄文時代前期に達成したという指摘である。佐原は関東地方における縦斧の出現を、縄文時代前期中葉、黒浜式期における乳棒状石斧の出現をもって実現したと推定した。また北陸から関西にかけての地域でも、北白川下層Ⅰ・Ⅱ式に伴う鳥浜貝塚出土の縦斧用膝柄が広く用いられ、縦斧優勢が実現したと指摘する。関東地方の乳棒状石斧の出現期やその用途に関して、佐原の指摘がおおむね追認される<sup>(注9)</sup>が、北陸及び関西については、研究の進展や新資料によって、縦斧の出現を縄文時代前期中葉以前に遡らせる指摘がなされている。まず、鳥浜貝塚の石斧柄について、網谷克彦は3類型4器種に分類し、縦斧用膝柄である1類については5型式に細分し、その変遷を明らかにした<sup>(注10)</sup>。その中で、最も古い第1型式の時期を羽島下層Ⅱ式以前に位置付けている。また、水ノ江和同は、近畿地方の磨製石斧について、その形態



第1図 各部名称

と柄への装着方法に着目し、<sup>(注11)</sup> 膝柄縦斧の使用が早期末葉に遡ると指摘している。  
磨製石斧の形態的特徴をもって、縦斧の出現時期を早期末葉まで遡らせることについて、<sup>(注12)</sup> 筆者も賛同的立場にあるが、先行研究で指摘されるように、<sup>(注13)</sup> 縦斧出現期の磨製石斧についてその系譜関係が不明確である点がこの時期の磨製石斧を考える上で、大きな問題となる。<sup>(注14)</sup> また、最も重要な、石斧柄の出土事例の少なさも、出現期の縦斧を考える上で大きな障害となっている。鳥浜貝塚の報告以降、縄文時代前期に遡る確実な石斧柄で、なおかつ装着部が遺存しており、斧台の構造がわかる資料は、京都府松ヶ崎遺跡と富山県小竹貝塚、そして沖縄県伊礼原C遺跡の3例しか増えていない。<sup>(注15)</sup> ただし、松ヶ崎遺跡出土の石斧柄は、最古級にあたる縄文時代前期初頭に遡る事例として注目に値する資料であり、本稿では、改めてこの資料の位置付けについて検討することとする。なお、石斧柄の部分名称は主に『木器集成図録』<sup>(注16)</sup> を参考に、第1図のように呼称する。

## 2. 松ヶ崎遺跡出土の石斧柄

松ヶ崎遺跡は、丹後半島西部、京丹後市網野町に所在する縄文時代から奈良時代にかけての複合遺跡である。グリッド調査では、沼地と包含層の広がり確認され、第4次調査では、奈良時代の包含層、弥生時代前期から中期の流路跡と護岸が<sup>(注17)</sup> 検出されている。

今回検討する石斧柄は、第5次調査の8トレンチ第18層から出土したものである。<sup>(注18)</sup> 調査地は包蔵地の西側にあたり、過去の調査成果により、遺物包含層の広がり推定されていた地点である。縄文時代の主な遺構に、石囲い炉と報告されるSX03がある。

8トレンチ出土の縄文土器は、第11層より上層に含まれる縄文時代中期から後期の土器群と、第12層以下で確認される縄文時代前期の土器群に<sup>(注19)</sup> 分類される。特に第12層以下の土器群は「松ヶ崎下層式」と仮称され、縄文時代前期初頭に位置付けられる。また、第12層に縄文時代前期の九州地方を中心に分布する轟B式土器が含まれる。石器は石錘5点、石皿2点、敲石2点が報告される。

石斧柄が出土した第18層は、上下2層に分層され、中間にアカホヤ火山灰由来の火山ガラスを含む粘土層が存在する。

### (1) 石斧柄の形態

報告書及び調査担当者の論考によれば、出土した石斧柄は8トレンチ第18層からの1点

のみであり、その用途を伐採具と推定している。磨製石斧の装着部については、「台外側から切り込み、固定部を3段に成形している」とされる。また、石斧柄の類例を鳥浜貝塚の出土品に求めている。以上の報告をふまえ、今回、改めて資料を観察・実測した際の筆者の所見を記載する。<sup>(注20)</sup>

本資料は、樹木の幹と枝を用いて製作された膝柄である(第2図)。まず、全体の樹皮を除去した上で、幹側を斧台とし、芯を除去せずに丸木のまま加工している。斧台長は、24.3cmであり、斧台基部は、両側面から削り込み、後方に尖らせている。次に、斧台基部から約10cmのか所を、斧台前面と側面から削り込み、一回り細く加工する。さらに、斧台基部から約18.6cm、斧台先端から約5.7cmのか所も斧台の周囲から削り込み、先端部を更にもう一回り細く削り出している。

最も細く削り出した先端部の斧台後面側に溝状の削り込みが施される。削り込みは、溝の中央を境に欠損しているが、残存部分を元に図面上で復元すれば、溝状の削り込みは、断面がV字ないしU字状であったと推定できる。削り込みの幅は、最も広い部分が1.5cm程度、深さは1.4cm程度と推定できる。これを、磨製石斧をはめ込む装着溝と判断した。

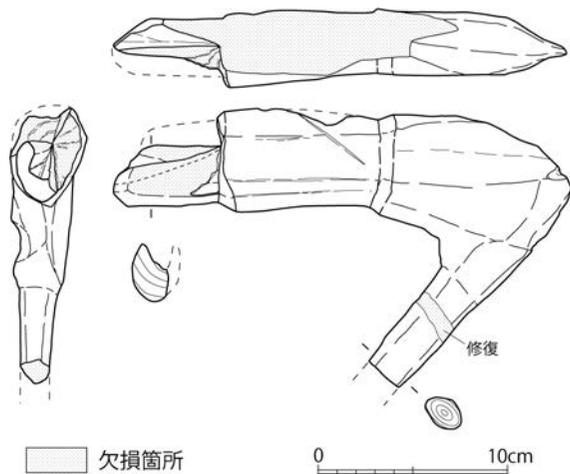
握りは欠損しており、約6cm程度が残存しているにすぎない。握りの径は、残存部で約1.5~2.5cm程度である。枝側は樹皮を剥いただけで、目立った加工は確認できない。斧台と握りの角度、つまり、着柄角度は、約50°となる。

## (2)石斧柄の分類

『木器集成図録』の分類に従えば、本資料は屈曲した頭部に斧台を作り出す曲柄のうち、斧身の刃の方向へ頭部が屈曲する膝柄であり、単一の素材で作り出した一木式に分類される。また、近年縄文から古墳時代の斧柄を概観、詳細な分類をおこなった飯塚武司の分類<sup>(注21)</sup>を参照すると、鳥浜貝塚の出土品同様、膝柄A式(一木式)のうち、縦斧(1類)で斧台に装着溝を作り出す(1膝柄A式I類1)タイプに分類され、縄文時代中期前半に斧台の形状が円筒状に型式変化し、縄文晩期まで残るとされる。

## (2)磨製石斧の装着

先行研究では、特定の膝柄と

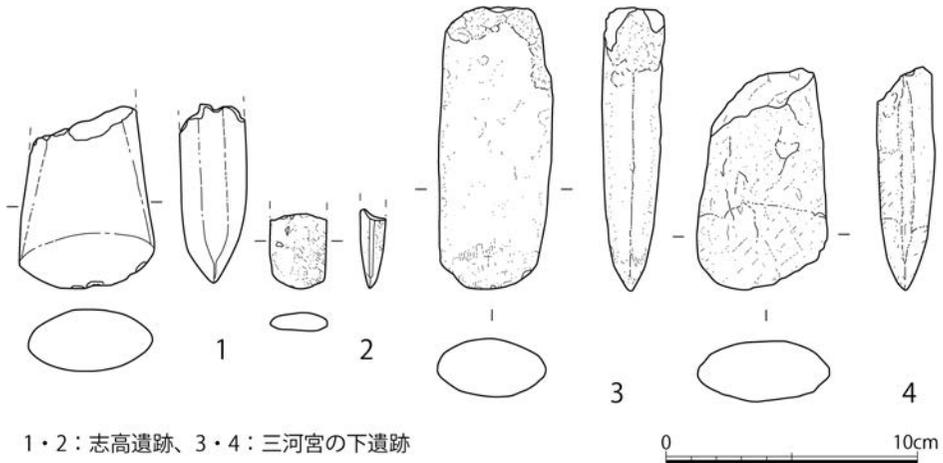


第2図 松ヶ崎遺跡出土石斧柄(S=1/4)

磨製石斧の形態が関連しているという指摘がなされている。<sup>(注22)</sup>そこで本資料でも、装着溝と斧台に削り込まれた段の形態から、この石斧柄に装着された磨製石斧の形態とその固定方法について考えていく。

まず、先端の装着溝に斧袖などを使用せず、直接磨製石斧をはめ込むとすれば、装着溝の長さが約5.7cmであるため、磨製石斧の全長は、5.7cm以上になる可能性がある。次に、この石斧柄を縦斧用として考えた場合、装着溝に対して磨製石斧の側縁を下にして装着すると想定される。装着溝の形態から推定すると側縁の横断面形態をU字からV字に整形した扁平な磨製石斧が該当するであろう。横斧用であると仮定した場合は、幅1.5cm以下の細身の磨製石斧が該当する。しかし、松ヶ崎遺跡には、縄文時代の磨製石斧の出土例がなく、石斧柄から推定される磨製石斧の存在を確かめることはできない。そこで周辺遺跡の出土事例を参考にすると、やや新しい時期の磨製石斧を含むが、福知山市三河宮ノ下遺跡と舞鶴市志高遺跡で縄文時代前期の磨製石斧が出土している(第3図)。これらの磨製石斧は、いずれも側縁を丸く成形し、横断面形が楕円形になる扁平な磨製石斧が大半をしめる。その一方で、基部の幅が、1.5cmを下回る鑿形の磨製石斧は存在しない。つまり、周辺遺跡の出土品に、この石斧柄に横斧として装着できる形態のものはなく、縦斧として使用された可能性が高いと考えられる。

磨製石斧の固定方法について、本資料の装着溝は浅く、磨製石斧をはめ込むだけでは十分に固定できない。縄文時代の石斧柄の固定方法には、縄文時代中期以降に、磨製石斧の固定に別材で製作した固定具を用いる例があるが、それ以前は装着溝にはめ込んだ磨製石斧を紐などで緊縛固定していたとされる。<sup>(注23)</sup>鳥浜貝塚には、本資料と同様に斧台を削り込む



第3図 周辺遺跡から出土した磨製石斧(S = 1/3)

ことで、段を作出した石斧柄があり、縄などを掛けて緊縛固定していたと推定されている。本資料の段は、削り出しが甘く、段差の角度も緩やかであることから、固定具などの硬質の部材ではなく、紐や樹皮など軟質の素材と組み合わせるものと考えられる。つまり、本資料も装着溝に磨製石斧をはめ込んだ後、紐や樹皮などで緊縛固定したと考えて無理はないだろう。ただし、この石斧柄には、異なる位置に2か所に段差が設けられており、そのうち斧台基部側の段差については、装着溝と離れた位置にあり、緊縛の目的が不明である点は注意が必要である。

#### (4) 小結

以上の点から、松ヶ崎遺跡出土の石斧柄は、斧台先端部に刳り込まれた装着溝に磨製石斧をはめ込み、緊縛によって固定した一木式縦斧用の膝柄であり、先行研究の分類に従えば、報告時に指摘されたように、鳥浜貝塚の出土品と同じタイプに分類される。また、装着溝から復元するに、斧台には基部横断面形態が扁平な楕円形となる全長5.7cm以上の磨製石斧が緊縛固定されていたものと推定できる。

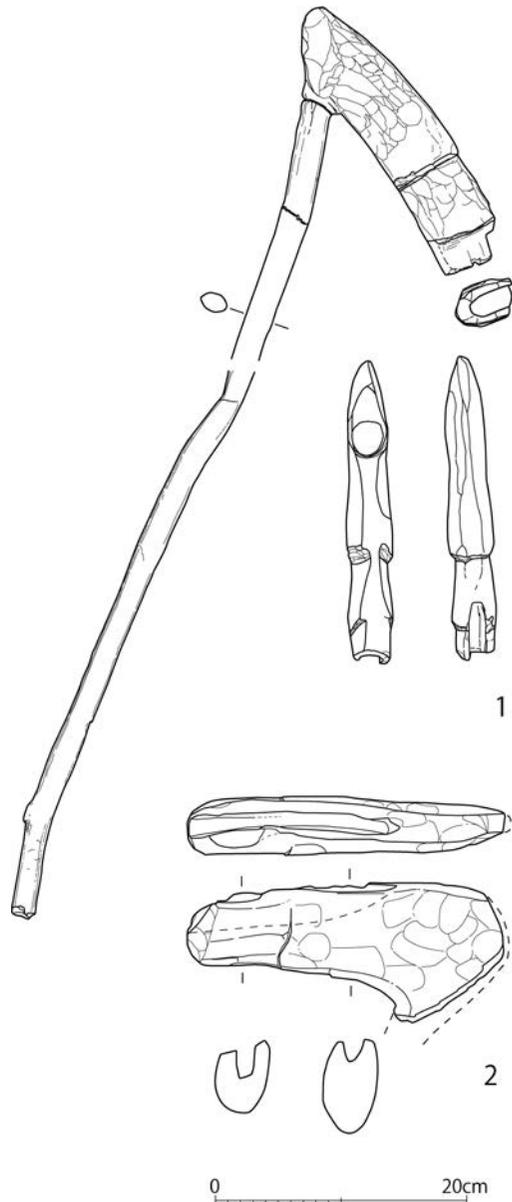
### 3. 出現期の縦斧用石斧柄

縄文時代前期の石斧柄としては、はじめにあげた3遺跡の例があるが、このうち、伊礼原C遺跡と小竹貝塚の出土例は、松ヶ崎遺跡より新しい時期のものであるため、比較対象としては鳥浜貝塚の資料が適切であろう。鳥浜貝塚の石斧柄に関しては、研究史で触れたように、網谷による詳細な検討が行われ、型式分類とその変遷が明らかにされている。今回はまず、その成果を元に比較検討を行なっていく。特に、同時代の資料となる、羽島下層Ⅱ式以前に位置付けられている第4図2の資料との比較を中心に行う。

網谷による石斧柄の分類は、ソケットの形態、緊縛紐の固定用と思われる段の数、段とソケット奥面との位置関係などを考慮しており、型式ごとに共伴する土器型式からその変遷についても言及している<sup>(註24)</sup>。特に第4図2の石斧柄は、鋭角型1類第1型式とされ(以下鳥浜第1型式と略称する)、その特徴は、ソケットが奥深くまで刳り込まれ、ソケットの底は斜面をなし、段はソケットの中央に位置するとされる。同様の観点から松ヶ崎遺跡出土の石斧柄を比較すれば、まず鳥浜貝塚の資料でいうところのソケットである装着溝の形態について、長さは松ヶ崎遺跡出土の石斧柄の方が短く、鳥浜第1型式の約3分の1程度である。一方、装着溝の底面が斜行するという特徴は一致しており、深さも浅く、幅も2cm以下と同程度である。しかし、装着溝の刳り込みは、松ヶ崎遺跡の例がV字ないしU字形になるのに対し、鳥浜第1型式では、底面が作出されたコ字形に近い装着溝を有している。また、緊縛紐の固定用の段の位置と数について、鳥浜第1型式は1段のみである

のに対し、松ヶ崎遺跡の例は、合計2か所に段が作出されているという差異が見出せる。段の位置についても、鳥浜第1型式では、装着溝の中央部分に段が作出されるのに対し、松ヶ崎遺跡の出土品では、1段目が装着溝の奥面と同じ位置に、2段目は斧台の中央付近に作出される。特に2段目に関しては、装着溝と離れた位置に作出されており、直接磨製石斧を緊縛することができず、鳥浜第1型式とは大きく異なる特徴と言えるだろう(第5図)。

緊縛紐の固定用の段について、松ヶ崎遺跡出土の石斧柄と同様に2か所に段を作出するタイプの石斧柄が鳥浜貝塚にも存在する(第4図1)。このタイプの石斧柄は、第3型式に分類され、北白川上層Ⅱa式段階に一時的な外因によって成立し、北白川上層Ⅱa式段階以降に継続しないとされる。この第3型式の場合、2か所に作出された段のうち、1段目と2段目の間まで装着溝が伸びており、どちらの位置で緊縛しても、直接磨製石斧を斧台に固定することができる。この点が松ヶ崎遺跡の例とは異なる点であるが、2か所に段を有するという特徴を重視



第4図 鳥浜遺跡出土石斧柄(S=1/6)

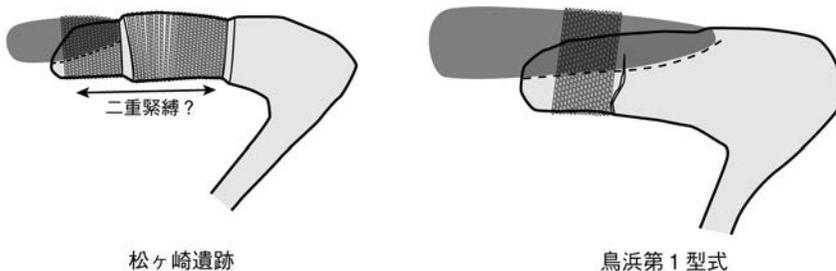
するならば、この第3型式の祖型を、先行する松ヶ崎遺跡の出土品に求めることができないだろうか。松ヶ崎遺跡出土の石斧柄は、鳥浜第1型式との間に明確な時期差が想定できず、同時期に互いに併存していた可能性が高い。つまり網谷の指摘が正しければ、緊縛紐の固定用の段を2か所に設けるという特徴は、松ヶ崎遺跡を含む特定地域もしくは集団の伝統であった可能性があり、後に鳥浜貝塚へと伝わったと想定することができるだろう。

このことは、早い段階から縦斧の緊縛方法や斧台の形態に地域性や集団ごとの差異が生まれていた可能性を示唆するものである。

次に、松ヶ崎遺跡出土の石斧柄で行ったように、装着した磨製石斧の形態に関わる属性を取り出して、磨製石斧の形態を復元する。検討する属性は、装着溝の長さ、幅、深さ、断面形態である。松ヶ崎遺跡出土の石斧柄と鳥浜第1型式においては、装着溝の長さや断面形態に差異確認された。鳥浜第1型式は、溝の長さが約17cmとなるため、単純の当てはめれば、全長がそれ以上になる磨製石斧が装着されたと想定される(第5図)。装着された磨製石斧の横断面形態については、装着溝の形態から、定角式に近い形態の磨製石斧が候補に挙げられるだろう。松ヶ崎遺跡出土の石斧柄にこのサイズの定角式磨製石斧をはめこむことは不可能ではないが、磨製石斧の全長に対して装着溝が短く、装着溝に過大な負荷がかかるものと想定される。一方、松ヶ崎遺跡出土の石斧柄に装着されたと考えられる全長5.7cm以上の扁平な磨製石斧を鳥浜第1型式の石斧柄に装着することも不可能ではない。しかし、装着溝に対して磨製石斧の全長が短いことから、長い装着溝は無駄となり、石斧柄の強度を下げ、そのメリットは特に無いと言えるだろう。つまり、両資料には互換性がなく、異なる形態の磨製石斧の装着を前提に製作されたものであると判断できる。

両資料の形態の違いについては、以下の二つの解釈が考えられる。一つは、緊縛紐の固定用の段と同様に、地域差もしくは集団ごとの差異という解釈であろう。鳥浜貝塚と松ヶ崎遺跡では、緊縛方法のみならず、使用する磨製石斧の形態も異なる地域・集団に属しており、それぞれに対応した石斧柄を作り出したため、装着溝の形態に差が生まれたという考え方である。

もう一つは、機能差に起因するという解釈である。『木器集成図録』では、弥生時代以降の資料を中心とするが、全長30cm以下の石斧柄を加工斧と位置付けている。今回検討した松ヶ崎遺跡の石斧柄と鳥浜第1型式は、両資料とも握りが欠損しており、全長が不明である。しかし、縄文時代後期の例になるが、全長30cmに満たない縦斧用膝柄が、埼玉



第5図 磨製石斧装着時復元図

県大木戸遺跡で出土しており、<sup>(注28)</sup>縄文時代に加工用の縦斧が存在していた可能性は高い。松ヶ崎遺跡出土の石斧柄と鳥浜第1型式では、装着した磨製石斧のサイズが明らかに異なり、鳥浜第1型式では、2倍以上の全長を有する磨製石斧の装着が想定される。これを、伐採斧とすれば、相対的に小さな石斧が装着された松ヶ崎遺跡出土の石斧柄は加工用の縦斧であったという推定も可能である。または、同じ伐採斧であったとしても、伐採対象や作業工程による使い分けがあった可能性も十分想定できるであろう。

#### 4. おわりに

今回は、松ヶ崎遺跡出土の石斧柄について、資料の観察と鳥浜貝塚出土品との比較を通して、その資料的位置付けを再検討した。

その結果、先行研究で指摘された通り、鳥浜貝塚出土の石斧柄に代表される縦斧用の一木式の膝柄であり、装着溝に磨製石斧をはめ込んで固定するタイプの石斧柄であることを再確認した。その一方で、同時代の資料となる鳥浜第1型式の石斧柄と比較すると、装着溝の形態と緊縛紐の固定用の段の数と位置に違いがあることが判明した。これらの違いは、装着された磨製石斧の違いや緊縛方法の違いに起因するものであり、その背景には、地域性または集団ごとの差異や、実際の使用状況に基づく機能差が推定された。佐原真は、出現期の縦斧用膝柄について、縦斧として世界的にも珍しい形態を、先行する時期の石斧柄を改良したためであるという予察を行なっている。もし今回検討した資料の形態が地域性や集団ごとの差異に起因するものであれば、出現期の縦斧用膝柄に見られる形態差は縦斧優勢成立以前に成立していた石斧柄の型式がそれぞれに反映された結果であったと想定することもでき、佐原の予察を肯定する資料と言えるだろう。ただし、先行する縄文時代早期以前の石斧柄が明らかではない現状においては、あくまで推定の域を出ず、これ以上の言及は難しい。しかし、縦斧優勢への組成の転換を縄文時代における磨製石斧使用の画期として重視するならば、この松ヶ崎遺跡出土の石斧柄の資料的価値は高いと言えるだろう。

謝辞 資料調査にあたり、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの伊賀高弘氏にお世話になりました。記して感謝申し上げます。

(かわさき・ゆういちろう = 京都府教育庁指導部文化財保護課技師)

注1 高橋健自1913『考古学』聚精堂

注2 八幡一郎1938「日本の乳棒状石斧」『人類学雑誌』第53巻第5号 pp.215-229

山内清男1932「磨製片刃石斧の意義」『人類学雑誌』第47巻第7号 pp.244-251

注3 佐原真1977「石斧論—横斧から縦斧へ—」『考古学論集』松崎寿和先生退官記念事業会

- 注4 加藤修ほか1973『湖西線関係遺跡調査報告書』滋賀県教育委員会
- 注5 森川昌和ほか1979『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1—』福井県教育委員会
- 注6 S.A.セミョーフ1968「石器の用途と使用痕」『考古学研究』第14巻第4号 pp.44-68 抄訳田中琢
- 注7 佐原真1982「石斧再論」『古文化論集』上 森貞次郎博士古希記念論集刊行会
- 注8 佐原真1994『斧の文化史』東京大学出版会
- 注9 小川岳人2001「第V章乳棒状磨製石斧の出現」『未完成考古学叢書3 縄文時代の生業と集落古奥東京湾沿岸の社会』アム・プロモーション pp.121-139  
 神野恵2002「伐採斧の出現とその背景—先史社会の用途論」『文化財論叢』3 奈良文化財研究所学報 第65冊 奈良文化財研究所 pp.19-30
- 注10 網谷克彦1996『縄文時代木製遺物・木工技術の基礎的研究』平成7年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書、網谷克彦2007「木器製作のムラ—鳥浜貝塚—」『縄文時代の考古学』6 ものづくり 道具製作の技術と組織 同成社 pp.112-122
- 注11 水ノ江和同2019「近畿の縄文磨製石斧」『文化史学』第70号 pp.239-251
- 注12 川崎雄一郎2018「縄文中期における磨製石斧の形態とその使用」『関西学生考古学研究会第60回例会～卒論・修論発表会～発表資料集』関西学生考古学研究会 pp.125-137
- 注13 前掲注9小川2001、前掲注11
- 注14 町田賢一ほか2014『富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告60 小竹貝塚発掘調査報告X』(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所、中村愿ほか2007『北谷町文化財調査報告書26 伊礼原遺跡』北谷町教育委員会
- 注15 上原真人1993『奈良国立文化財研究所史料36 木器集成図録 近畿原始篇』奈良国立文化財研究所
- 注16 村田和弘1997「1. 松ヶ崎遺跡発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第75冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) pp.1-12
- 注17 戸原和人1998「1. 松ヶ崎遺跡第5次発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第82冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター pp.1-24
- 注18 戸原和人2001「網野町松ヶ崎遺跡下層遺物の研究」『京都府埋蔵文化財論集』第4集—創立二十周年記念誌—(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター pp.17-30
- 注19 岡田憲一2008「編年研究の現状と課題④ 近畿・中国・四国地方」『縄文時代の考古学』2 歴史のものさし 縄文時代研究の編年体系 同成社 pp.180-197
- 注20 実物と報告書に掲載された実測図とのサイズがあまりに違うため、報告書に掲載された図面の縮尺に誤りがあるものと判断した。報告では、実測図以外に石斧柄の法量を示す記述がなかったため、今回は、保存処理後の資料を改めて観察するとともに、再実測を行った。
- 注21 飯塚武司2019「斧柄の考古学」『東京都埋蔵文化財センター研究論集』33 東京都埋蔵文化財センター pp.1-30
- 注22 山田昌久1991「道具の復元」『季刊考古学』35 雄山閣 pp.48-51

注23 前掲注22

注24 前掲注10、鳥浜貝塚の石斧柄の中には装着部が斧台後面に開口する溝状ではなく、横穴状に刳り込まれているものがあるため、報告書および参考文献中では、装着溝に当たる部分をソケットと呼称している。本論では引用か所を除いて、装着溝と名称を統一して論じる

注25 松ヶ崎遺跡出土の石斧柄に見られる、斧台基部側の2段目の段差について、憶測の域を出ないが、1段目で磨製石斧を固定した上で、さらにその上から二重に緊縛を施して緊縛固定の強度を上げたり、斧台に紐や樹皮を巻きつけることでひび割れや破損を防ぐといった目的があったのではないかと考えている。

注26 前掲注10

注27 網谷克彦1989「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観』I 雄山閣 pp322-325

網谷克彦2004「帝釈峡遺跡群に磯ノ森式は存在するか - 帝釈峡遺跡群における北白川下層式系土器の再検討」『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』18 広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室 pp.99-121

矢野健一2013「七 近畿」『講座日本の考古学』3 縄文時代上 青木書店 pp.441-474、網谷は鳥浜第1型式を仮称「勝山式」期に位置付けており、「勝山式」は、鳥浜貝塚において羽島下層Ⅱ式に対して層位的に先行するとされる。一方、松ヶ崎遺跡12層以下の土器群について、戸原は羽島下層Ⅱ式並行と位置付けられる志高遺跡Ⅱ期の前段階の土器群と位置付けている(前掲注18)。両土器群の直接の関係は不明確ながら、いずれも羽島下層Ⅱ式成立直前に位置付けられる土器群であり、本論では特段時期差を想定しない。

注28 金子直行ほか2018『大木戸遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書444 (公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

注29 前掲注3

挿図出典

第1図 上原(1993)(前掲注15)、p.13 fig.12を参考に筆者作成

第2図 筆者作成

第3図 1・2:(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター1989『京都府遺跡調査報告書』第12冊 p.93 第59図より再トレース

3・4:(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター1982『京都府遺跡調査概報』第2冊 p.26 第20図より再トレース

第4図 1: 福井県教育委員会1979『鳥浜貝塚—縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査1—』p.118 第58図より再トレース

2: 網谷克彦1996『縄文時代木製遺物・木工技術の基礎的研究』平成7年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書 p.22図1より再トレース

第5図 筆者作成